

MELTA 国際学会への派遣報告書

木村みどり(東京女子医科大学)

6月7、8日とマレーシアのクチンで行われた第21回 MELTA International Conference に出席した。今回のテーマは Reframing English Language Education: New Environments, New Needs, New Solution であった。“New Environments”とは、最近のテクノロジーの進化による新しい学習環境、多民族間の教育格差、また、益々進むグローバル化を指し、“New Needs”とは、それらの環境に即した教育政策の変更の必要性を取り上げ、そして“New Solution”で、現実に即した英語力を身に着けるために学習者、教員、両親、行政が一致団結しようとするものであった。

Plenary session では、上記のテーマにそって、コミュニケーション能力を向上させるための解決方法が様々な角度から述べられた。その多くは、教員教育に関するものであったが、その中で、Writing course における Coherence の指導方法について述べられた Chan 先生の内容が興味深かった。実際に学生を指導したカリキュラムを紹介しながら、マクロとミクロの視点から、Step by step で学生の指導を行うことの大切さとその実際の成果が紹介された。

フォーラムは二つ設定され、「英語教師資質向上」と「英語力低下にどのように対処するか」という日本でもおなじみのトピックに、フロアの教員も加わり熱い論議が交わされた。ただ、日本と大きく違うのは、「落ちた英語力」と言っても、そのレベルが日本とは比較にならないほど高いことだ。例えば、街へ出て老人から子供まで、どんな人に英語で話しかけても必ず英語で返事が返ってきた。学会での休憩時間も英語以外の言語は聞かれなかった。また、テレビも英語の放送番組がたくさんあり、インプット、アウトプットが十分になされる環境であることがわかる。

この学会の特徴となる行事に、MELTA-HEART、MELTA-SMART-KIDS、Creative Teacher Showcase がある。私にとって、この学会への参加は2回目となるが、どのような教育をすれば子供たちがあのように流暢に英語が話せるようになるのか大変興味があったので、今回は特に MELTA-SMART-KID の催しものに時間を割いて出席した。これは、小学高学年と中学低学年を対象とした英語語彙力コンテストで、各学校より送り出されてきている代表者6名のグループで、学校対抗戦を行う。2種類のコンテストが行われた。初段階は、英語のネイティブの先生が単語を一つ発音し、そのスペルを所定の時間内に正しく言わなければならない。一人ずつ大勢の前に立ち、単語のスペルを慎重に言っていく。正解は回答直後に発表されるので結果はすぐにわかり、応援に来ている家族の中から賞賛の声やため息が聞こえてくる。そこで聞かれた単語を少し紹介する。小学高学年には、reflect, topple, cajole, kaleidoscope, bazaar, respiratory, harass, dimension など、中学低学年には、symmetry, tolerant, illegible, chrysanthemum, obvious, carnivore, microscope, moustache などが尋ねられていた。段々高度な単語になってくると、出題者にその意味を尋ねることもできる。ただし、その全ては英語でのやり取りである。司会者の教員(MELTA の会員)も流暢な英語で説明しながら司会を進行していくが、それをすべて子供たちは理解し、対応していく。私は、このような単語をスラスラと答える子供たちの様子を見ていて恐ろしいとさえ思った。これだけのレベルの単語を、日本の大学生のどれだけが理解し答えられるだろうか？その後、2段階になると、単語のしりとりが始まった。例えば”nephew”という最初の単語がネイティブの先生から与えられ、その単

語の最後のアルファベットで始まる単語を次に続けて言い、スペルアウトする。この作業をグループ間で続け、所定の時間内に正しくスペルを言えた数の多さで勝者が決められた。子供たちは動揺することもなく冷静に答えていくので、MELTA の会長に、このコンテストのために何か指定された英語の本があるのかどうか尋ねたが、そのようなものはないということであった。

また、私の関心を引いたのは、**Teacher's showcase** である。これは、幼児から高校までの英語教育で特に素晴らしい実践を行っている 8 組の教師に自分のブースが与えられ、実際に自分たちの実践を教材も含めて実演したり説明したりするものである。これはコンテストになっており、私もこの **Judge** を頼まれ、高校の教員で、**Project Based Learning** で社会問題を取り扱い、自然災害の調査とコミュニティでの災害防止、避難地区の確認などを生徒に行わせているものに 1 票を投じた。問題への取り組み方、調査内容の構成の仕方、**Presentation** の仕方、**Vocabulary list**、**English expression** など、大変細かく独自の指導マニュアルを作成し、丁寧な授業を行っていた。3 か月にわたる **Project** の間に書かせた **Essay Writing** と単語テストの結果から、英語力の進歩を確認することができた。本当に忍耐と努力の継続の授業には感服した。拙の発表も、「東日本大震災の状況を英語で世界に伝える」という **Project** を通して、学生の **Self-efficacy** がどのように高められていったかというものだったので、彼女の **Project** に大変興味を持った。学生の発表を全て **Digital Storytelling** にして実際に **Movie** として会場で流したので、学生の変化を具体的に感じ取っていただき、多くの先生方から好意的な評価をいただいた。

最後に大学での英語教育に関する興味深い発表があったので報告したい。その大学では、授業はすべて英語で行われており、卒業時には学生全員に英語の **Oral Test** を一人 20 分、二人の教員が行う。結果は 1-6 のレベルで評価され、4 を取らなければ卒業できない。そのような高度な基準に学生を持っていくために、授業には **You Tube** の利用や海外の大学教員との講義交換などを積極的に行い、英語力向上に力を入れている、ということであった。

この MELTA の学会をとおして、マレーシアの人々の英語教育にかける情熱、努力、意気込みを強く感じた。と同時に、日本の英語教育の現場の生ぬるさを深く反省するとともに「英語が不得意の日本人」の汚名を挽回するためにも、英語教員は頑張らなければならないと心に誓った。